

『かまくら春秋』 2021年8月号

連載リレーエッセイ ころろにひかる物語・三〇五

## 「貴船の螢」 永田和宏

螢の季節になると思い出す、ひとつの光景がある。

私は大学を卒業後、企業の研究所に入って、東京で、がんに関連した薬を作る仕事を始めていたのだが、数年その仕事をやっているうちに、どうしても基礎研究をやりたい思いを振り捨てがたくなっていった。当時、一歳と三歳の子があったにもかかわらず無謀にも企業を辞め、無給で京都大学に戻ってきたのである。

三年ほどを無給の연구원として働いたのち、京都大学の結核胸部疾患研究所というところで講師の職を得ることができた。学位も取り、白血病細胞に関する研究も軌道に乗っていた。おまけに歌人として作品や評論を依頼される頻度が増え、科学と文学を二つの軸として、私にとってもっとも忙しく、時間的にもっともきつい時期であった。夜の一時以前にラボをでるということはほとんどないような生活であった。

ある日、何かの偶然から、夕方早いうちに帰宅するということがあった。子どもたちは大喜びだったが、せっかくだからどこかに螢を見にいこうかということに。やはり若かったのだろう。あんなにぎりぎりの生活をしていて、たまに早く帰ってきたらのおんびりしたいと今ならば思うのだろうか、当時はたまの機会だからこそ、家族でどこかへとなったのである。

当時私たちは、京都市の北、岩倉に住んでいた。そこから貴船までは車で三十分ほどである。貴船の螢と言えば、反射的に

ものおもへば沢の螢もわが身よりあくがれ出づる魂かとぞ見る 和泉式部 御拾遺集・卷二十

が思い出される。「男に忘れて侍りけるころ、貴船にまいりて、御手洗川に螢の飛び侍りけるを見て詠める」なる詞書がついている。男に顧みられなくなって物思いにふけっている式部の目の前に、あたかも自らの身を離れてふらふらと抜け出ていった魂のような螢が見えるというのである。なんともあえかな螢である。きっと、そんな螢が見られる、と思いつつ貴船へ。

最初の鳥居から少し行くと、貴船川沿いに小さな空地があつて車が止められる。そこに車を停めて貴船神社まで歩くことにした。だいたい距離はあるが、まあゆっくり歩くのもいいだろう。そして、車を降りたところまで目にしたのが、それまで目にしたことのない螢の大群だったのである。

それは正直、螢といったものではなかった。その数、数百どころではなく、数千、あるいは数万だっただろうか。数えきれない螢の群舞。川の向うは斜面になっていて、その木々の茂みが、ほとんどクリスマスツリーと言ってもいいほどのギンギラギンだったのである。茂みからは絶え間なく螢が舞い上がり、川の上からこちらの広場まで隙間なく飛び回っているのであった。まさに光の網であり、家族四人が、その網にすっぽりと捕らえられてしまった雰囲気である。

私たちはしばらく口を利くのも忘れて茫然とするほかなかった。螢を捕ろうと張り切っていた幼い子供たちでさえ、何も言わずにポーと見ているばかり。周りには誰ひとり人はいない。車から出た途端に、異界に紛れ込んでしまった気分であった。光の乱舞する異界。

どのくらいそこにいたのだろう。一匹の螢も捕らず、変に高揚しつつ、しかしまた変に口数少なく、私たちは家に戻ったような気がする。

あくる日だったか、二三日後だったか、もう一度見に行こうとまた同じ時刻に同じ場所にいったのだが、これまた信じられない程、螢の数は少なかった。いやこれで普通と言うべきなのだろうが、数十匹の螢が、こんどは「あえかに」光の跡を引きながら舞っているばかり。あれは何だったのだ。あの夜の螢は、私たち家族の螢へのイメージをどこか根本から変えてしまったような気がする。なんだか一生分の螢を見てしまったような……。

ルシフェリン・ルシフェラーゼと言いたれば理科系人は嫌われたらむ 永田和宏『饗庭』

こんな歌を作ったことがあった。螢の生物発光は、ルシフェリンという化学物質がルシフェラーゼという酵素によって酸化されることによる。酸化されるときに生み出されるエネルギーの一部が光となって光るのである。と、まあ、螢を見ながら、こんな話をするから、理系の人間は風情がないなどと嫌われるのだ、というのが私の歌。

貴船の螢を見に行ったとき、まだ幼稚園だった娘の紅は、後年、私と同じく細胞生物学の研究者となった。我が家は娘も、息子の淳も歌人として活動しているが、その娘が第一歌集で、こんな歌を作った。

ほうたるのひかり追いつつ聞くときにルシフェラーゼは女の名前 永田紅『日輪』

私の歌は頭の片隅にはあったのだろう。私が「理科系人が嫌われたらむ」と嘆いているのに対して、本歌取りとも言えそうな永田紅の一首は、下句「ルシフェラーゼは女の名前」がなんとものびやかでいい。言われて見れば、なるほど「ルシフェラーゼ」という酵素の名は、なんだか女性の名前のような響きである。若い女性の感性に驚くとともに、同じ素材を詠って、親子でこんなさりげない歌のやり取りをできるのを幸せなことでもあると思うのである。